

16th EULAR Annual European Congress of Rheumatology

村岡 成

東邦大学医学部内科学講座膠原病学分野 (大森)



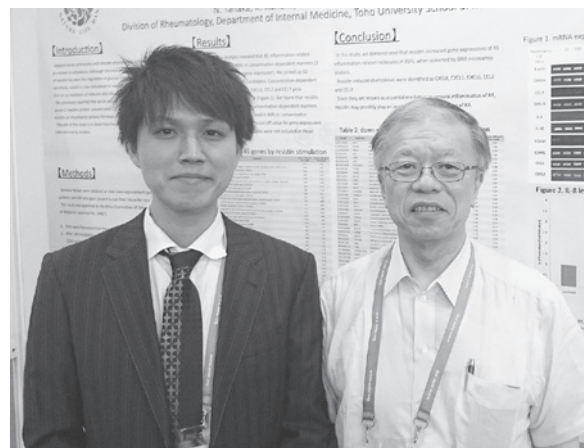
2015年6月10～13日にイタリアのローマで開催された第16回ヨーロッパリウマチ学会議 (16th EULAR Annual European Congress of Rheumatology) (EULAR: European League Against Rheumatism) に参加する機会を頂いた。ヨーロッパリウマチ学会議はアメリカリウマチ学会議と並び、最大規模の国際学会であり世界中の研究者の先進的な研究がいち早く発表され、さまざまな治療推奨を行っている中心的な学会である。

数多くの遺跡を有するローマは、好天に恵まれ多くの観光客でにぎわっていた。スリ少年団とも遭遇したが、今となっては良い土産話になっている。東邦大学医療センター大森病院膠原病科からは川合教授、佐藤医師、筆者の3人で参加し、学会開催期間中の多くの時間を佐藤医師とともに行動した。毎晩のように現地のビールで乾杯し、研究について熱く議論をした (と信じている)。また川合教授と3人で観光した際、バチカンは混雑のあまりに断念、トレビの泉は工事中、結局ジェラートを3人で舐めながら歩いたのだがこのことは、川合教授に8年間ご指導頂いた中で一番の“奇行”だったと思う。

さて、学会会場である Fiera di Roma は、大きな建物が Hall 1～10 まで一直線の通路の両脇に立ち並んでいた。ちょうど中心にあるポスター会場に到着した頃には汗ばむくらいの陽気になった。ポスター会場の雰囲気は、集合写真を撮っていたりと国内の学会に比べるとやや明るく感じた。ポスターセッションを中心に各国の研究者の報告を見ていると、リウマチ膠原病疾患において著しい治療効果をあげた生物学的製剤に関する発表が今年も多かった。それらの大規模臨床試験の結果が多く発表されており、さらに新たな治療ターゲットを模索する生理活性物質に関する基礎的な研究が目立っていた。新しい知見を紹介するセッ



Fiera di Roma にて



ポスター会場にて

ションにおいても新規の生物学的製剤の開発が進む乾癬性脊椎炎が取り上げられていた。一方で、生物学的製剤の有害事象についても複数の発表が行われていた。生物学的製剤の使用が感染症の発症頻度を増加させることは知られているが、12カ月後の結核のスクリーニング検査が陽転化するという報告には、日常臨床において慎重なスクリーニングを実施することの重要性を再確認させられた。筆者が最も注目したテーマは、抗リン脂質抗体症候群における新規の抗凝固薬（direct oral anticoagulant：DOAC）の有用性ならびに有害事象についてであった。膠原病患者における併用薬の数は少なくなく、ワルファリンとの相互作用が問題になることがしばしばある。そのため、DOACは抗リン脂質抗体症候群の新規治療薬として期待されているが、有用性や有害事象は明らかではない。Dr. Cohenはrivaroxabanとwarfarinの多施設共同比較試験を進行中であることを講演しており、今後の結果が非常に楽しみであ

る。

2年前のヨーロッパリウマチ学会議では、筆者はレプチンが関節リウマチ滑膜線維芽細胞におよぼす影響について報告したが、今回は同じアディポカインに属するレジスチンについて指導医の立場で佐藤先生の発表を見守った。運よく学会が行っているポスターツアーに選ばれたため、イヤホンマイクを手に10名程度のツアー参加者とのディスカッションとなった。以前も感じたことだが、服装や髪形が自由なせいかな堅苦しさがなく意見交換がしやすかった。今回もその中で寄せられた質問から研究の盲点を知ることができた。そして、何よりこうした刺激が今後の研究の励みになっており、今後も積極的に海外学会に参加して、研究に力を入れていきたい。

最後になりますが、ご指導いただいている川合教授や、今回の学会参加を支えてくれた医局員、博士研究員、秘書の方々に深く感謝を申し上げます。